

## 博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	半 澤 典 子
論 文 題 目	戦前期ブラジル・サンパウロ州ノロエステ地方と日本語新聞 －香山六郎と聖州新報－
論文審査担当者	主 査 坂 口 満 宏 ㊞
	審査委員 根 川 幸 男 ㊞
	審査委員 本 田 毅 彦 ㊞
	審査委員 谷 口 淳 一 ㊞

本論文は、ブラジル・サンパウロ州のノロエステ地方に生活拠点を置き、現地で日本語新聞『聖州新報』を創刊した「移民知識人」香山六郎の言動などをもとに、香山の個人史を構築するとともに、ノロエステ地方を中心とした戦前型ブラジル移民史における「民間主導論」を提示し、民間主導を支援してきた日本語新聞の再評価を目標とするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 序 章 研究目的および研究課題・研究方法
- 第1章 戦前期ブラジル移民概論と時期区分
- 第2章 香山六郎の移動の原点
- 第3章 渡航者意識から移民意識へ
- 第4章 聖州新報創刊から廃刊まで、戦後の香山
- 第5章 ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割
- 第6章 ブラジル移民知識人香山六郎の言動－移民俳句と日本語新聞を通して－
- 第7章 コーヒー干害低利資金貸付問題と移民政策  
－1920-30年代のブラジル・サンパウロ州を中心に－
- 終 章 成果と意義、新たなる課題と今後の展望
- 参考文献
- 初出一覧
- 巻末資料 香山六郎・ブラジル移民史関係年表

序章では、上述した研究目的を提示したうえで、研究史として主にブラジルのサンパウロ人文科学研究所における移民史研究の経緯と主たる成果について言及する。ついでブラジルにおいて発行された日本語新聞に関する研究状況ならびに香山六郎に関する先行研究の状況を指摘し、香山のブラジル渡航以前の足跡についての記述は『回想録』を除くと

皆無に等しいとした。

第1章「戦前期ブラジル移民概論と時期区分」は、本論文が分析の対象とするブラジルのサンパウロ州ノロエステ地方とブラジルに渡った日本人移民との歴史的関係について概観したもので、日本とブラジルとの移民事業が始まった時点において、その事業は民間主導であり、日本政府は直接、サンパウロ州政府との労働契約に関与することがなかったことを確認する。そのうえで、輸送船による日本からの移民数の増減を基準とした日本側の時期区分を提起するとして1908年から1945年までを黎明期(1908-1923)、発展期(1924-1935)、衰退期(1936-1941)、空白期(1942-1945)の4期に区分し、移民受入(ブラジル)側においては政治体制を基準として第1共和制(1888-1929)、第2共和制(1930-1945)に分けるとした。

第2章から第4章までは「移民知識人」の一人として位置付ける香山六郎の個人史を詳細に叙述するもので、本論文の前半部分を構成する。

第2章「香山六郎の移動の原点」は、香山の『回想録』を主たる典拠とし、1886年の香山六郎の誕生からブラジル渡航を決めた1908年までを扱うもので、子どものころから海軍士官になることを夢見ていた香山だったが、熊本の済々黷在学時代に海軍兵学校を受験するも不合格となったため、徴兵を回避するため海外へ渡航することとしたこと、移民会社の都合によって当初のペルー行きではなくブラジル行きとなったという経緯を跡づけていく。

第3章「渡航者意識から移民意識へ」は、1908年のブラジル渡航から1921年にブラジルのバウルーで日本語新聞を創刊する直前までの香山の行動を跡づけたもので、単に一渡航者という意識しか持っていなかった香山が、結婚後、モンソン植民地に入り、借地農業に従事する過程でしだいに移民意識を持ち始めたとする。そしてそこでの農作業を通じて植民者の一人になったという意識と『大阪朝日新聞』のブラジル通信員になったことの二つが、後に『聖州新報』を立ち上げることになる根拠であるとした。

第4章「聖州新報創刊から廃刊まで、戦後の香山」では、1921年の『聖州新報』の創刊から1941年の同紙廃刊までの経緯を跡づけ、あわせて第二次世界大戦後の香山の動向として移民史の執筆や言語研究に打ち込み始めたことと香山の家族について言及する。このうち本章の前半では、1910年代から30年代にかけてブラジルで発行された主要な日本語新聞について概観し、1921年にバウルーで創刊された地方紙『聖州新報』の特徴を指摘する。そして後半では1934年にブラジルの政情変化に対応すべく『聖州新報』社がサンパウロ市へ移転していった要因を述べ、移転後は紙面の拡大を図るとともに1937年8月には日本語新聞三紙(『日伯新聞』『伯刺西爾時報』『聖州新報』)の中で、『聖州新報』がいち早く日刊紙へと移行していった状況を詳述する。しかし1941年5月、ブラジル政府による外国語新聞の発行禁止令により廃刊を宣言せざるを得なくなったとした。

第5章「ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割」は、1910年代から30年代のサンパウロ州における前掲日本語新聞三紙の創刊事情と対抗意識、紙面構成と発行部数・販売経路等について概観するもので、香山が創刊した『聖州新報』は、地域密着型地方紙としての基盤を確立したばかりでなく、ノロエステ日本人移民社会の情報

の要として、各種産業組合の基を築く示唆を与えるものであったという。

第6章「ブラジル移民知識人香山六郎の言動－移民俳句と日本語新聞を通して－」では、「ブラジル移民知識人」としての香山六郎の言動を明らかにする事例として「移民俳句」をとりあげ、文芸表現の場であった新聞俳句と新聞俳壇の繁栄と分裂状況、ブラジルの自然と生活に適応した新たなブラジル季語を見出そうとした香山の俳句観について考察する。そしてブラジルに生きた日本人としての香山を評して、日本俳句の基本を理解しつつも、ブラジルの風土に合致したブラジル俳句を創作し、日本俳句を越えたブラジル俳句の完成を願った日本人であったとした。

第7章「コーヒー干害低利資金貸付問題と移民政策－1920-30年代のブラジル・サンパウロ州を中心に－」では、まず、1924年の末にノロエステ地方を中心に発生した干害によって打撃を被った日本人コーヒー農家を救済しようとして日本政府に低利資金の貸し付けを請願した上塚周平たちの運動とその人脈を概観し、日本政府が85万円の資金を低利で貸し付けるにいたった背景を考察していく。ついで低利資金85万円の貸付方法と償還状況を示し、順調な返済が見込まれたが世界恐慌や大霜害の影響を受けたことで、元金の返済にも窮するようになり、延滞金も生じる事態になったという。八五低資問題が低迷する中、上塚周平を中心とするノロエステ地方の農民たちは、日本政府の救済を期待するのではなく農業生産活動上の協同化を望むようになり、低利の貸付金を農業基盤整備事業の資金に当てていったとまとめる。そして最後にこうした動きを見せた「初期独立自営農民」はブラジル日本人移民史の中でどのように位置づけられるのかと問いを發し、日本政府から資金貸付を受け農業基盤を構築したという意味においてノロエステ地方の農民は国策移民に準ずる「準国策移民」に位置づけられるのではないかとした。

終章では本論文の要旨をまとめるとともに、①香山の『回想録』の原本である『清書原稿A』の収集ができたこと、②ブラジル俳句を確立しようとして季題収集取り組んだ文人香山の姿勢を發見したこと、③コーヒー低利貸付資金問題について1926年の帝国議会衆議院特別予算委員会で貸付案が可決されていた事実を確認することができたこと、④コーヒー低利貸付資金問題に関する膨大な外務省記録の中に低利で貸付を受けたブラジルの日本人農民から日本政府に対して送られた公的な謝礼文を見出したことの4点を本研究の成果として挙げ、結びとした。